
addicted to you

太美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a d d i c t e d t o y o u

【ZPDF】

Z0701F

【作者名】

太美

【あらすじ】

奥手なボクの告白。彼女に無事に伝えられますように・・・

「いつの頃からだらう？」

彼女が気になり、ついつい見つめてしまつ・・・・・・

彼女は太陽のように笑い、そこによると暖かく包み込む。

夏の日差しのように、主張する光ではなく、春や秋の日差しのよう
に穏やかな光。

穏やかな光にボクも包まれたいと思つ。思うけど、やつそつ近づけ
ないのが現状。

彼女の周りには、いつも暖かい空氣の流れがあつた。

そろそろ、自分の進路について考えて行動を起こさないといけない
のに、ボクの頭は彼女が占拠していく。

どちらかと言うと、自分で言うのはおかしいがシャイな方で、17
にもなつて自分から話しかける勇気が無い。

ボクのそんな気持ちに、親友の啓太けいたが気付いた。

「最近、どうしたんだよ？付き合い悪いし・・・・・・」

「うん、なんかダルいんだよね・・・・・・」

「なになに？珍しいじゃん！ダルいって！何か隠してるだらう！」

セツニヒー、啓太は愛あるヘッドロックをしてきた。

啓太のヘッドロックは、愛があつても痛い。

結局、帰りにネットカフュで打ち明けることになった。『気は進まないが・・・・・・』

「つていうか、どうせ奥手の元ちゃんの恋愛系じゃないの?..」

ブースに入るなり啓太に詰め寄られた。

「えつーつていうか、気付いてたのかよ?..?..」

「当たり前じゃんー最近このみとも話してたんだよ。絶対誰か好きな奴できたって!..」

このみは啓太の彼女。しかも・・・・・彼女とも仲良し。

「で、誰なんだよー奥手の元ちゃん!..」

「いや、つていうか、まだ好きとかのレベルでもないし・・・・・」

「今時じけや珍しいな。告白して、確認すればいいじゃん。

相手にされなかつたら、バイバイ。脈ありなり続けて育めばいいじゃん?

で、相手は誰よ?..

何だか、やばい展開になつてきた。このまま、言わずに済む方法はないものか？

啓太の事だから、このみを使って絶対行動を起こされる。

「言いたくないっ！」

言い終わるが早いか、啓太の愛あるヘッドロック。今回は手加減がない。

「痛いよ！放せって！啓太！！！」

「口割る気になつたか？？？」

「『めんつて！』

啓太の腕の力が緩んだ。でも、いつでも再開できるように、手は口ツクした状態だった。

「誰だよ？奥手の元ちゃんのお手伝いしてあげるからわ・・・・・・

」

きっと、啓太の顔はにたにたしてゐに違ひない！

「ゆつこだよ。このみと仲いいから、言いたくなかったんだよ・・・

・

言い終わるが早いか、啓太はヘッドロックを外し、携帯でメールを打ち始めた。

暫くすると、メールが返信された。

「元ちゃん、今からこのみとゆつじ、ここに来るつて。ちよひづく人でお茶してたらしいわ。」

「えつ！啓太！お前、何をメールした？？？」

「元ちゃんといてるから、来ないかつて。」

「本当にそれだけ？」

「やうだよ。何、もつと色々送つてほしかったの？」

そういう訳じゃないけど、心の準備というか、奥手のボクには心臓が止まりそうだった。

彼女達が到着すると、ネットカフュから場所を移動する事になった。啓太とこのみはさつたと手を繋ぎ、前を歩く。彼女とあつけにとられた。

「びっくりしたよ。このみにメールが来て、いきなり店出るつて言うし・・・・」

「じめんね。時間、大丈夫なの？」

「実は、そもそも帰らないとヤバイの。いったい何の用だったのかな？？」

「あー、やうだ。よかつたら、アドレス教えてもらへる？」

ボクの精一杯。

何とかアドレスの交換。結局彼女は帰つていった。

啓太とこのみには悪いけど、ボクも帰ることにする。メール送つと
けばいいし・・・・・

家に帰ると早速彼女からメールが来た。

” 今日はびっくり。このみに来て！って言われて到着したら啓太く
んに元ちゃんがいて・・・・

アドレス交換したから、早速嬉しくって送っちゃった ”

” 嬉しくって送っちゃった ” って、どういふことだ?????

これは、素直に喜んでいいのか？メル友増えて喜んでるのか??

でも、チャンスに代わりはないから、ボクも即効返信をする。

” ボクも驚いた。実はさ、話があつたんだけど、話せなかつた。今、
時間大丈夫？”

顔が見えないから、何だか簡単に告白できそつな気がしてきた。

指は震えてるけど・・・・・

” 大丈夫だよ 話つてなあ～に?????”

これは、奥手のボクにもチャンス到来！」のタイミングで言わない
と！決心して返信。

”突然だけど、伝えたいことがあるんだ。迷惑かも知れないけど、
僕の気持ち

a d d i c t e d t o y o u ”

送信ボタンを押す手が震えてる。少し迷つたけど、送信を押す。

携帯を閉じて、眼を閉じる。

このまま返信がなかつたらどうしよう？

不安に思つてると、彼女からの返信。不安と緊張で携帯を開く。

”今、出れる？出れるなら、三蔵公園に来て欲しいんだけど？”

”大丈夫。今から家を出るよ。”

そつ返信して、ちゅうじボクの家と彼女の家の中間にある公園に向
かう。

向かう道々、いろんな事が頭をよぎる。

なんで、呼び出されたんだ？

急に変な事言つたから怒られるのか？

それとも、彼氏がいて、彼の逆鱗に触れたか？

何なんだよー。いつもなら数分の距離なのに、果てしなく続くかのように思つた。

公園に着くと、彼女は「ラン」に乗つて待つてた。

「うんね。急に呼び出して……………」

「うわわわわ……………？」

「うそ、やっぱ、直接言葉を聞きたくて……………」

「え？？」

「元ちゃんの声で、やつとのメールと同じ事、言つて欲しいの……………」

メールだから、言えた事なの……………

本人にして、奥手のボクが言えるかな???????

でも、きっと、彼女も勇気を出してここまで来たんだし……………

・・勇氣出したのかな？

そんな事はいいや。とにかく、気持ちを伝えよつー

「実は、最近、ずっと気になつてた。」

「うん……………」

「突然で、びっくりするかも知れないけど……………」

「……………うん。」

本人が前にいてると、やつぱり言こびらか……………

せつかくのチャンスだし……………

啓太の言つた通り、だめもとで言つてみるか……………

そんないい加減な気持ちなのかな？

自問自答してる時間はない。奥手の元は卒業しないと……………

一步を踏み出さないと……………

「ゆうじのじと……………ボク、好きかも知れない……………

突然で「めん。うん。……………やつぱり、好きだ……………」

言つてしまつた。緊張と後悔と、開放感と……………何だか不思議。

「ありがと……………」

そつ言つと、彼女はゆっくにブランコから立ちあがつた。

太陽のような笑顔を浮かべながら、ボクの方に近づく・・・・・

この笑顔がボクのaddicted・・・・・・・

ボクの耳元で、背伸びをしながら、ゆっこは囁いた。

「ありがとう。私も、同じ・・・・・・・」

気がつけば、抱きしめていた。

これからも、ボクはaddicted to you・・・・・

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。
今後の参考にしたいので、どんなことでも感想をいただければ、う
れしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701f/>

addicted to you

2010年10月10日08時59分発行